

# 文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

# だより

第31号 / 令和6年6月28日発行

川の流れば絶えずしてただの水にあらず  
—江戸・東京の“水道”事情—

2

女子高等教育機関の伸展と文京

4

館蔵資料紹介『江戸名所図会』

6

令和5年度のあゆみ

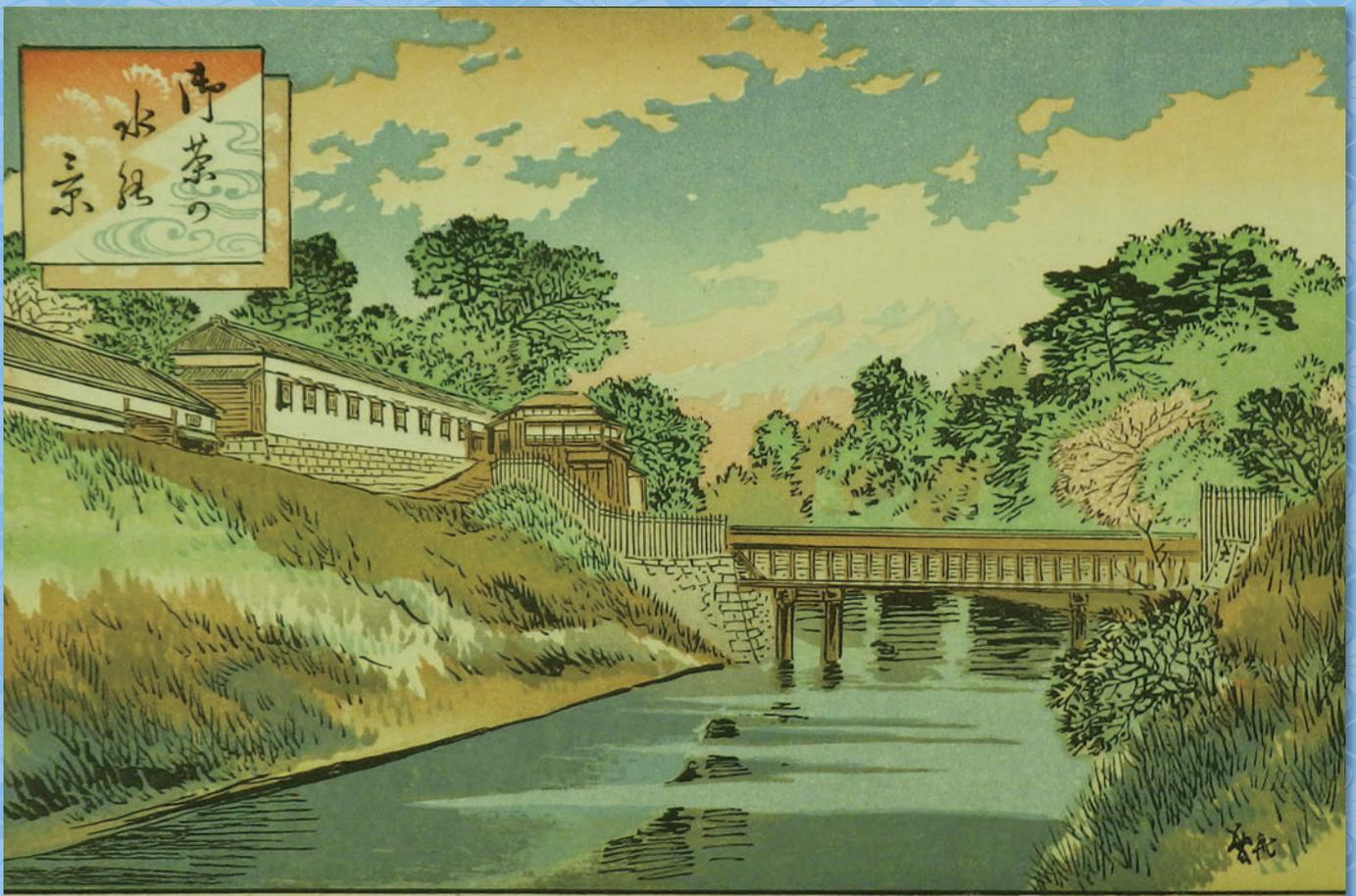
7

資料をご寄贈くださった方々

8

令和6年度の催し

8



▲「東京名所 御茶の水の景」(館蔵)

# 川の流は絶えずして ただの水にあらず —江戸・東京の“水道”事情—

## 江戸のまちづくりと水道

阪神淡路大震災や東日本大震災、中越地震に熊本地震そして能登半島地震など、わたし達の日々の暮らしに甚大な被害をもたらす自然災害が続いています。

この数年間、世界各地で頻発する地震や異常気象に加え、日本国内では今後も、首都圏直下型や南海トラフ等の大規模災害の発生も懸念されており、予断を許さない状況です。

生活に直結するライフラインを破壊してしまう未曾有の自然災害の中でも、特に人々の生命維持に影響が大きいものは、飲料水の確保、そして污水处理です。

平常時には当たり前だったものが失われ、機能しなくなることで、改めてその重要性が認識されるどころです。

太田道灌の築いた中世の江戸のまちは、近世に至り、天正18年（1590）の徳川家康の入府を契機に、本格的なまちづくりが開始されました。

天下普請（≡土木・建築工事）と呼ばれた江戸城の建設と城下町の整備が表裏一体の関係で進められる中で、天下人、家康が心をくだいた事の一つが、江戸のまちに暮らす人びとの生活水の確保でした。

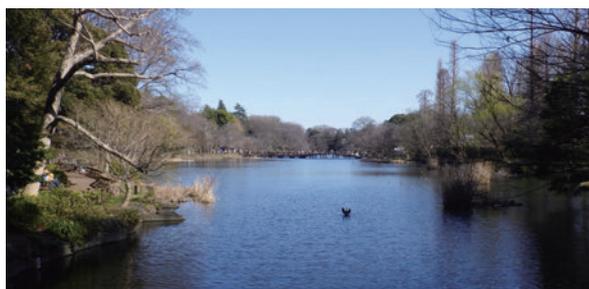
## 大久保藤五郎、江戸水道の事、うけたまわる

近世初頭の江戸の城下町は、江戸城東南側に存在していた“江戸前島”と呼ばれる微高地周辺の沖積低地帯を造成し、人工的な地盤を形成したものです。

沖積低地を埋め立てたこうした土地では、掘り抜き井戸を掘削しても湧出するのは塩分濃度の高い海水で、それを直接、飲料水として口にするのはできませんでした。

そこで家康は、三河以来の直参家臣団の武将の一人だった大久保藤五郎忠行に、江戸の城下町への給水工事を担うことを命じたとされています。

大久保藤五郎忠行（生年不詳-1617）は、家康が松平姓を名乗っていた頃から仕え、家康の江戸入府の頃は戦で受けた負傷が原因で歩行に難があり、家康の嗜好にあう餅菓子作りに専従する菓子司だったとされています。



神田上水の水源の一つ「井の頭池」

その一方で土木工学知識にも長け、江戸市中（≡城下町）への給水に最適な地形に立地する水源地の選定作業を担い、ついに水質の良い池泉を見極めたとされます。忠行は主たる水源を井の頭池と定め、更に善福寺池（川）と妙正寺池（川）などの河川が合流した、神田川が流下する目白台下に大洗堰を設け、それ以前から存在した小石川の水利施設を拡充して“神田上水”として整備したと伝えられます。

この大土木工事に関する史料はほとんどなく、その具体的な開始時期は不明ながら、神田上水奉行が置かれた寛文6年（1666）には一定の完成を見ていたものと思われます。その功績によって忠行は、“主水（もんと）”を名乗ることを許されたと言われます。



古写真「神田上水懸樋(かけひ)」(館蔵)

## 江戸の上水と人々

ところで、“上水”という言葉には、少しばかり注意することが必要です。

様々な歴史の概説書では、上水＝飲料水（≡現代の水道）と説明する記述がほとんどです。

しかしながら、水源から自然流下してきた川に降雨を集積したものが専らであった当時の上水には、現代の水道施設の様な濾過装置や浄化設備はありませんでした。

つまり、塵芥や雑菌が入り込んでしまう水を、そのままの状態ですべて飲料とすることはできなかったと思われる。

一説には、上水から給水された市中の共同の溜枥に小魚がまぎれていたことも伝えられ、また生活で出た芥塵や動物、時として人間の死体さえが遺棄されていたことも、そうした行為を禁じた触書（禁令）の存在などから理解されるのです。お江戸の水事情を如実に物語る逸話です。

その一方で、古典落語の一節“江戸の水道（上水）で産湯を使う”という言葉が示す様に、江戸市中の人々にとっては、水銀（≡水道料金）を払う上水を使うことが、江戸に住まう上での自負心、ステータスシンボルでもありました。

いずれにしても触書や落語に取り上げられる程に、上水というものが、江戸町人にとって生活に不可欠なライフラインの一つであったことは、現代の私達にとっての水道と同様の存在意義を持っていたと言えるでしょう。



水道橋駅前にある神田上水懸樋跡記念碑



石井研堂著『水道の話』(館蔵)

## 江戸上水の消長

江戸時代の上水（都市用水）は、江戸市中には神田上水に次いで承応3年（1654）に玉川上水が設けられ、更には徳川幕府にゆかりの深い白山（小石川）御殿や湯島聖堂、そして寛永寺などへの給水を目的に、玉川上水から千川上水が分水されるなど、6系統の上水が設けられたものの、程なく様々な理由で廃止され、江戸時代全般を通じて継続し、近代期に至っても存続していたのは、神田、玉川の両上水だけでした。

江戸以外の城下町でも、辰巳用水（加賀）や石井樋（佐賀）、赤穂水道（赤穂）、笠原水道（水戸）など、およそ40か所を数える城下町に都市用水が設けられていました。

そうした江戸時代由来の上水（都市用水）も、明治維新を契機とする生活様式の変化の中で改変が求められるようになりました。

明治政府では、法制度や医療、化学など様々な分野で欧米諸国から後に“お雇い外国人”と呼ばれることとなる技術者や学者を招聘して、日本人の技術者、研究者への指導育成にあたらせると同時に、土木・建築工事などライフラインの整備事業にも従事させています。

そんな中で発生したコレラの蔓延は、人びとの衛生意識を高め、近代的な上・下水道の設置事業を促進させる事となりました。その近代期の上下水道の敷設にも“お雇い外国人”の功績を抜きにして語ることはできません。

ヘンリー・スペンサー・パーマーによって、居留地の横浜に日本初の近代水道が設置されたのを皮切りに、東京にも近代水道、そして下水道が敷設されてゆきました。

中でも大役を担ったのが、“浅草十二階”とも呼ばれた凌雲閣の建設に携わったことでも知られるウィリアム・キニモンド・バートンです。

明治政府の設置した水道設置に関する委員会から委嘱され、現在、東京都庁が所在する淀橋の地に大規模な浄水場を設け、更に東京市内（≒都内）の芝（港区）そして本郷（文京区）の二か所に給水所を設置しました。今日に続く、水道事業100年の礎が築かれていったのです。

“ご一新”などとも呼ばれた欧米諸国の先進技術の急速な導

入は、当時の人々の生活にも大きな変化をもたらしました。江戸時代までの日本社会は、中国大陸や朝鮮半島由来の文物や思想を範とする“和魂漢才”でした。原則としてオランダに限定されていたヨーロッパ伝来の知識や技術も、幕末期にはアメリカ合衆国を始めとする欧米各国からの西洋文化の波を受け、大人はもちろん、こども達にも影響を与えています。“窮理熱”と呼ばれた近代科学啓蒙期に、『小国民』の編著者として若年層の活字文化の隆盛をもたらした一人が、研堂の筆名で知られる石井民司です。石井研堂はまた、児童向けに科学知識を説くシリーズ本を出版しており、古代から近代に至る水道の歴史を概説した『水道の話』も公にしています。

## ここ（江戸時代）からミライへ —今日まで。そして明日から—

頻発する地震や火災に苛まされながら、その都度、生活を再建し、資源循環型環境社会であった江戸時代当時の日本。

明治維新前後に日本を訪問したイザベラ・バードを始めとする欧米諸国の知識人、文化人たちがこぞって、リサイクルとリユースを前提とし、豊かな自然環境と調和した、日本の都市美を絶賛しています。

世界的規模の大災害や、様々な疫病に直面している現代のわたしたちが、江戸時代当時の社会や文化に学ぶこともまた、数多いのではないのでしょうか。

令和6年度の当館の特別展は、江戸の市井に暮らした人々の生活を支えた都市用水の一つである神田上水、そして神田上水の給水域を補完する目的で設置された玉川上水から分水された千川上水と、明治年間の近代水道の中から文京区との関わりの深い千川水道について紹介します。

この展示会は、江戸時代から現代へと至る水道関係の資・史料を所蔵する東京都水道歴史館、そして玉川上水に関する特別展を開催する新宿歴史博物館との、3館連携事業として開催します。それぞれの展示会の詳細については、各々の館のホームページ等で紹介します。ぜひご来場ください。

(加藤元信)

# 女子高等教育機関の 伸展と文京

## 近代的な女子教育の始まり

日本における近代的な女子教育は、明治5年（1872）に発布された「学制」において、「幼童子弟は男女の別なく」教育する方針が打ち出されたことに端を発しています。その後、文部省の御雇外国人D・マレーによる児童教育を担う専門的な女性教員育成の提言を受けて、明治8年に神田宮本町（現在の文京区湯島三丁目）に東京女子師範学校が設立されました。中村正直を摂理（校長）に迎えたこの学校が、日本初の近代的な女子高等教育機関だったと言えるでしょう。

同校には、女子が高い水準の教育を受ける機会が少なかったこともあり、明治18年に女医第一号となった荻野吟子（埼玉県熊谷出身）、明治19年に駒込幼稚園を開いた古市静子（鹿児島県種子島出身）など、全国から強い向学心を抱く女性たちが集まりました。同校は、たびたび所属や校名の変更がありましたが、国立大学法人お茶の水女子大学として現在も活動を続けています。本稿では、明治23年から同41年までの同校の名称「女子高等師範学校」から、同校を「女高師」と略称します。



開校当時の校舎（明治八年）

「女高師」開校当時の校舎（明治八年）（館蔵）

「女高師」は、明治29年に専修科を、同31年には研究科を設け、女子教育に携わる専門的な人材を育成し、女子に高度で専門的な研究をおこなう場を提供するなど、常に日本の女子高等教育界をリードする存在でした。「女高師」の研究科からは、大正5年（1916）に東北帝国大学理科大学化学科を卒業して初の女性学士となった黒田チカや、昭和2年（1927）に初の女性博士（理学）となった保井コノなど、学者として活躍する女性が多く輩出されました。

また、明治5年に初の官立女学校として創立された東京女学校は、明治10年の同校廃止に伴って生徒が東京女子師範学校英語科に編入され、一時閉鎖、所管替えなどの紆余曲折を経て、明治23年に「女高師」に付属する高等女学校となりました。現在はお茶の水女子大学附属高等学校として活動を続けるこの学校からも、昭和15年に初の女性弁護士、昭和27年に

は初の女性判事となった武藤〔三淵〕嘉子など、各界で活躍する人物が輩出されています。

## 女子の進学先の増加

明治維新以後、「読み、書き、ソロバン」と呼ばれる寺子屋的な教育を離れ、女子にも外国語や宗教を教える学校が、キリスト教団体を中心に各地で設立されました。区内でも、明治6年に中村正直が小石川江戸川町に同人社を設立し、宣教師による英語教育が女子にもおこなわれました。同人社で学んだ加藤〔武田〕錦子は、「女高師」で学び明治10年に小日向水道町で加藤女学校を設立（同15年廃校）、その後文部省留學生女性第一号としてアメリカに留学、帰国後は「女高師」で後進の育成にあたりました。

明治23年の榎信太郎『東京遊学案内』（少年園刊）には、東京に所在する高等教育機関として45校が掲載されています。その内、女子が通える学校は東京音楽学校、華族女学校を含めても8校です。その内、高等師範学校附属女子高等師範学校（「女高師」）、女子高等師範学校附属女学校、跡見女学校の3校が、現在の文京区域に所在しました。跡見女学校は、江戸時代には京都で私塾を開いていた跡見花溪によって明治8年に神田で創立され、明治21年に小石川区柳町に移転してきました。同校は、現在でも学校法人跡見学園として、区内大塚を中心に活動を続けています。



跡見花溪と跡見女学校（館蔵）

『東京遊学案内』に掲載はされていませんが、同時期の文京区域には、小石川安藤坂に所在した樋口一葉も通った歌塾「萩の舎」、「女高師」の裁縫教員渡辺辰五郎が湯島の自宅に開いた和洋裁縫伝習所などもありました。この他、女子医術専門学校（現在の東京女子医科大学）の創立者吉岡弥生が、明治22年に湯島の済生学舎に入学していることから、同校でも女子を受け入れていたことが判っています。

明治34年には、女子の進学先に特化した『女子東京遊学案内』（積文堂刊）が出版されています。ここでは、女子の進学先として66校が掲載され、その内の14校が文京区域の学校でした。女子の進学先を紹介する書籍は、その後も各社から出版され、昭和13年に出版された『標準東京女子学校案内』（武田芳進堂刊）には、335校が収録され、その内50校が文京区域の学校でした。東京における女子の進学先は、明治23年からの約50年間で40倍以上に増加していました。

## 女子の高等教育制度の整備

当初は曖昧な位置づけのままにその数を増やしていた女子教育機関でしたが、明治20年代後半から徐々に体系化が進められ、初等（小学校）、中等（高等女学校、実業学校など）、高等（「女高師」、専門学校）の制度的な位置付けが定められました。尋常小学校を卒業した女子で進学を希望する者には、高等小学校、高等女学校、実業学校の選択肢が設けられました。この内、高等小学校に進んだ女子には、卒業後に女子師範学校への進学が認められ、女子師範学校、高等女学校を卒業した女子には、更に女子高等師範学校、女子専門学校への進学が認められました。

小学校を卒業した女子を対象とする中等教育に関しては、明治24年に中学校令が改正されて、女子への教育をおこなう高等女学校にも初めて言及がなされました。その後、明治32年に女子教育機関を規定する私立学校令・高等女学校令が発令され、その制度が整えられていきました。明治36年には、大学に準じた高等教育機関を規定する専門学校令が発令されました。高等教育機関となる専門学校を受験する資格に「四箇年以上ノ高等女学校ヲ卒業」した者が明記されるなど、女子への高等教育に関する制度も整えられました。

## 様々な専門学校の誕生

女子教育機関の体系化が進むのと同時期に、文京区域には女子に専門的な教育の機会を与える学校が次々と設立されました。その中には、後に専門学校の認可を受けたことにより、高等教育機関として認められる学校もありました。

渡辺辰五郎の和洋裁縫伝習所は、明治25年には東京裁縫女学校と改称し、「高等ナル學術技芸ヲ授」けて裁縫教員を育成する初の専門学校として、大正11年に認可を受け、東京女子専門学校となりました。同校は、板橋区に移転し、現在は東京家政大学として活動を続けています。

明治34年、「女子ノ美術の技能ヲ發揮セシメ専門ノ技術家及教員タルベキ者ヲ養成」する目的で、本郷区弓町二丁目に女子美術学校が開校されました。東京美術学校教授の藤田文蔵や教育家の横井玉子らが設立しましたが、資金難から翌年には順天堂の佐藤志津を校主に迎えました。私財を投げうって学校の為に尽くした志津は、「自らの着物を学校に着せた」とも評されました。本郷区菊坂町、杉並区などへの移転を経て、現在は女子美術大学として活動を続けています。

また明治34年には、以前から女子への高等教育の必要性を訴えていた教育者の成瀬仁蔵が、小石川区高田豊川町に日本女子大学校を開校しました。同校は、設立当時から予科となる附属高等女学校を設けており、明治37年にはいち早く専門

学校の認可を受けるなど、近代的な大学を指向した様子が見てとれます。同校は、現在も日本女子大学として活動を続けています。

大正6年には、女性の歯科医師を養成する明華女子歯科医学講習所が、香山明によって本郷区田町に開校されました。後に同区元町に移転した同校は、大正10年には専門学校としての認可を受けています。大正15年に東洋女子歯科医学専門学校と改称した同校は、現在では男女共学となりましたが、東洋学園大学として同地で活動を続けています。

この他にも、東京女子体操学校（現在の東京女子体育大学）や女子経済専門学校（現在の新渡戸文化短期大学）など、様々な分野の女子高等教育機関が、文京区域で産声を上げました。

文京区域には、女子の中等教育機関にあたる高等女学校や実業学校も、数多く設立されています。女子美術学校の附属として設立された佐藤高等女学校などの附属校の他、東洋高等女学校や錦秋実科高等女学校など、多くの女学校が設立されました。区内に設立された女子の高等・中等教育機関には、戦後の新しい学制においても、大学や高校として教育活動を続けている学校が数多く存在しています。



「少女運だめし双六」(大正16年(昭和2年)『少女世界』新年号附録、川上千里画、館蔵)部分

## 女子高等教育機関の成果

先述した保井コノは、明治35年に「女高師」を卒業、同38年には第一回「女高師」理科研究科生となり、アメリカへの留学も経験しました。昭和2年には、論文「日本産の亜炭、褐炭、瀝青炭の構造について」で、東京帝国大学から理学博士号を贈られました。『少女世界』大正16年(1927)新年号の附録「少女運だめし双六」には、女学校を卒業した女性の進路として、「先生」、「タイピスト」、「美容術師」、「女医」などと共に、「女博士」が提示されています。日本初の女性博士誕生を前に、高等教育を受けた女性に注目が集まっていたことが伺えます。

当館では、「女高師」、及び跡見女学校が開校して150年となる令和7年(2025)2月から、区内における戦前の女子高等教育の歴史を紹介する収蔵品展を開催します。“文の京”と称される文京区で、花開いた様々な教育機関を、収蔵資料から紹介する予定です。

(加藤 芳典)



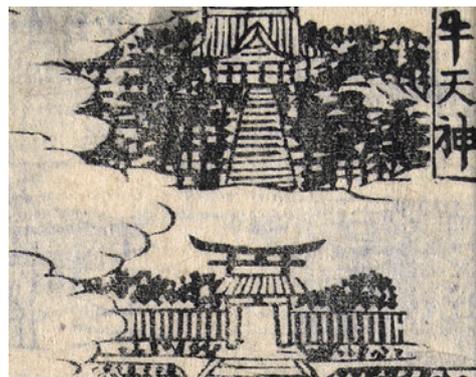
佐藤志津 (館蔵)

# 館蔵資料紹介 『江戸名所図会』

『江戸名所図会』という斎藤長秋・梶磨・月岑編、全7巻20冊、天保5年・7年（1834・36）刊行のものが知られていますが、ご紹介する『江戸名所図会』はこれとは別の本です。大きさは17.7×11.8cm、全7巻1冊で、弘化2年（1845）の序文があります。国文学研究資料館で公開している国書データベースには、山崎美成編、歌川芳盛画とあります。山崎美成は国学者で小山田与清や屋代弘賢らに師事し、曲亭馬琴とも交流がありました。歌川芳盛は、歌川国芳の弟子で一光斎とも号しました。序文には、世の中には住んでいる所の名所を知らない人、名所の名前は知っていても行ったことのない人も、あるいは、せっかく名所に出かけてもその歴史などを知らないこともあり、残念だと思っていたところ、この本の原稿を携えて訂正を求めて来た人がいる、この本を読めば名所のことがわかり、遠くの人も熟読すれば名所に出かけなくてもその様子を知ることができるかと書かれています。本の最後に「文溪堂 丁子屋平兵衛」とあります。丁子屋は、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』第八輯以降の版元としても知られ、『北越雪譜』も刊行しています。



【図1】『江戸名所図会』



【図2】「牛天神」部分

この『江戸名所図会』は、約140ヶ所の名所を紹介しています。序文の後に、「江戸名所八景之図」として「品川の景」「日本橋の景」「吉原の景」「猿若町の景」「深川八幡の牡丹」「永代橋の景」「小金井の景」「堀の内会式参り」が描かれています。本文は、ページの上部に名所の簡単な絵が描かれ、下に名所を紹介する文章があります（【図1】参照）。タイトルには「江戸」とありますが、実際は「大宮氷川社」（現・さいたま市）や川崎大師で知られる「平間寺」（現・川崎市）など、江戸から少し離れた名所も紹介されています。文京区内では、「根津権現」「伝通院」「護国寺」「聖堂」「湯島天神」などが取り上げられています。

『江戸名所図会』の最初に紹介されている名所は、「牛天神」です。

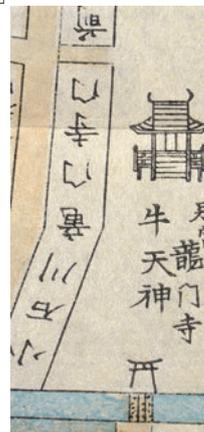
牛天神の社別当八天台宗にして、泉松山龍門寺と号。神体ハ菅公ミヅから彫刻したまふと云。鳥居の額ハ、頼常君寄附なり。天満宮の額ハ、近衛内大臣家広卿筆なり。元禄五年建立なり。

「牛天神」の別当寺や神体など、簡単な案内が記されています。絵（【図2】）には、境内が高台にあることがわかるように階段があります。流れに架した橋とその先にある鳥居は、江戸切絵図の【図3】「東都小石川絵図」や【図4】「小石川辺図」にも、同じように描かれています。この他にも、「大観音」とある光源寺の絵には、建物の中から仏像がのぞいている様子が見えたり、白山神社の境内には源義家ゆかりの「旗桜」があるなど、限られた紙面の中でそれぞれの名所の特徴を捉えた絵が描かれています。斎藤長秋・梶磨・月岑編の『江戸名所図会』に比べると、本の大きさも小さく、ページ数も少ないですが、名所の様子を端的に紹介した内容になっています。

（齊藤智美）



【図3】



【図4】

# 令和5年度のあゆみ

## 小・中学生のための歴史教室

「ブントを探せ! 歴史館クイズラリー」

◆7月27日(木)～8月31日(木)

参加者数……184人

## 特別展

「湯島の地に聖堂ありー江戸・東京の学び舎と文京ー」

◆10月28日(土)～12月10日(日)

入館者数……2,432人

◆記念講演会

12月3日(日) 会場:文京区民センター

参加者数……97人

「湯島聖堂にみる伊東忠太の建築意匠」

／角田真弓氏(東京大学大学院工学系研究科技術職員)

## 収蔵品展

「はれ あめ くもりーぶんきょうの空模様ー」

◆2月10日(土)～3月17日(日)

入館者数……2,485人

## 文の京ゆかりの文化人顕彰事業

◆朗読コンテスト

応募総数……274人

本選:11月5日(日) 会場:跡見学園女子大学プロッサムホール

課題作家:宮沢賢治 本選出場者……16人 観覧者数……126人

◆歴史講演会

「私の知っている牧野富太郎」／邑田仁氏(東京大学名誉教授)

8月5日(土)

会場:文京区民センター

共催:東京大学大学院理学系研究科附属植物園

参加者数……会場107人、オンライン参加……307人

◆史跡めぐり

「賢治・啄木が暮らした街を巡る」 10月19日(木)

参加者数……43人

## ミニ企画

◆3月29日(水)～6月25日(日)「比べてみよう!ー2枚の切絵図ー」

◆6月28日(水)～9月24日(日)「文京のラジオ体操」

◆9月28日(木)～12月24日(日)「洋学のススメ

ー福沢諭吉、小石川水道町に日参すー」

◆1月5日(金)～3月24日(日)「中勘助の『銀の匙』

ー文京ゆかりの文学作品ー」

## 史跡めぐり

◆「小石川植物園を訪ねて 播磨坂から千川通り一帯を歩く」

11月16日(木) 参加者数……43人

◆「江戸の学問の足跡を巡る」 12月7日(木)

参加者数……45人

◆「江戸川公園から肥後細川庭園(椿山)に行く」 2月22日(木) 参加者数……38人

## ワークショップ

「みんなの名所ものがたり～声によるコミュニティ情報のアーカイビング～」

◆第1回 12月16日(土) 会場:大塚地域活動センター 参加者数……2人

◆第2回 1月20日(土) 会場:駒込地域活動センター 参加者数……2人



歴史教室



特別展(小石川植物祭会場)



朗読コンテスト



ミニ企画2



歴史講演会



収蔵品展

\* 施設整備のため、令和5年9月5日、9月12日午後、9月13日、9月27日は休館した。

## 令和6年度の催し

\*それぞれの事業の開催日時や募集方法等は、歴史館ホームページおよび「区報ぶんきょう」にて、お知らせします。  
ホームページ：<https://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/index.html>



### 小・中学生のための歴史教室

ブンタとタイムトラベル—昔のくらしをのぞいてみよう!—  
7月20日(土)～9月1日(日)

館内の展示を見て答えるクイズを実施します。事前申込不要、参加者にはオリジナルグッズを贈呈。

### 史跡めぐり

歴史館友の会まち案内ボランティアが、史跡等をご案内します。区報等で募集します。

参加費 保険40円程度・入館料等実費

### 特別展

川と人と水道と 神田上水、千川上水と文京  
10月26日(土)～12月8日(日) ※予定

江戸市中100万人の人々の生活を支えた6系統の上水(水道)の内、文京区と関わりの深い神田・千川の両上水と近代期の千川水道について紹介します。東京都水道歴史館、新宿歴史博物館との事業連携企画として開催します。

### 文化人顕彰事業 朗読コンテスト

本選 11月3日(日・祝)午後1時～4時

会場:跡見学園女子大学プロッサムホール

文京区及び友好都市金沢市ゆかりの作家の作品を朗読。

※参加者・観覧者募集の方法等は、ホームページ等でお知らせします。

### 文化人顕彰事業 歴史講演会

文京ゆかりの文化人に関する講演会を予定しています。

区報等で募集します。

### 収蔵品展

近代の女子高等教育と文京(仮)

2月8日(土)～3月16日(日)

“文の京”文京区における戦前の女子高等教育の歴史を、館蔵資料から紹介します。

### 常設展示ボランティアガイド

ふるさと歴史館ボランティアガイドが、第2・第4日曜日、午後1時から5時まで常設展示の解説を行います(申込不要・入館料のみ)。上記日時以外のご希望も受付けています。3週間前までに、文京ふるさと歴史館へ電話連絡し、申請書を提出してください。

### ワークショップ

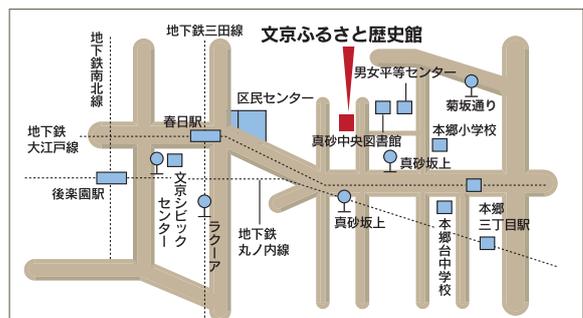
区内の名所にまつわる個人の思い出をもとに新たなものがたりを創出します。ホームページ等で募集します。

### レファレンス【現在休止中】

毎月第2・4木曜日午後1時30分から4時30分まで、館内レファレンスコーナーにて、ご質問にお答えします。

## 利用のご案内

- ◆開館時間：午前10時から午後5時まで
- ◆休館日：月曜日・第4火曜日(休日にあたるときは翌日)  
くんじょう期間、年末年始
- ◆入館料：一般個人100円、団体(20人以上)70円  
中学生以下・65歳以上無料  
\*特別展は別に定めます
- ◆交通：東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」から徒歩5分  
都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩5分  
都営バス「都02」「上69」「真砂坂上」から徒歩1分  
文京区コミュニティバスBーぐる「菊坂通り」から徒歩6分  
「文京シビックセンター」または「ラクーア」から徒歩10分
- ◆ホームページ：<https://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/index.html>



## 文京ふるさと歴史館

〒113-0033 東京都文京区本郷四丁目9番29号  
電話(03)3818-7221